

「日露戦争と情報」 高橋是清、金子堅太郎、明石元二郎

平成13年10月6日・高根台公民館

きょうは情報というものを軸にして、日露戦争について話してみたいと思います。日露戦争と太平洋戦争では、一体何が違ったのか。私は一つは、情報を大切にしたかどうかの違いが、大きかったと思います。明治の元老たちは、明治三十五年一月、日英同盟を結んだ時でも、伊藤博文にしろ井上馨にしろ、小うるさいくらいに、いろいろと注文をつけています。外務大臣の小村寿太郎は「本来外交というものは、外交より内交、国内の交渉の方が難しいものだ」と云ったそうですが、日本の安全には、イギリスと同盟した方がいいのか、それともロシアと妥協した方がいいのか。意見に違いこそあれ、彼らは共通の情報を土台にして真剣に論議したのです。そして、そこから組み立てた政略、戦略に、最高の人材を当てて戦ったのが日露戦争でした。

太平洋戦争の時は違います。情報がどこかで止まってしまつて、最高首脳の総合判断に全くと云つていいほど生かされないのです。しかも国際情勢の認識が極めて自分本位で、何でも日本に有利なように、都合よく解釈してしまつたことです。これは元首相の若槻礼次郎が回顧録に書いているのですが、アメリカからいわゆる「ハル・ノート」を突き付けられ、首相経験者を集めた重臣会議が開かれ、日米開戦の九日前、昭和十六年十一月二十九日のことですが、首相の東条英機は「とうてい受諾出来ない」の一点張り。ハル・ノートの内容を仔細に検討して、重臣たちに意見を求めると云うのではなく、「開戦はもう当然」といった態度だったそうです。若槻が「戦争半ばに石油が不足するようなことがあつたら、どうして戦争を遂行出来るのか」。日本にとつて最大の問題点を指摘しても、「石油は決して不足しない。心配には及ばぬ」と強弁するだけでした。

重臣会議は開戦後も毎月一回開かれ、東条首相が戦況報告をするのですが、内容は「勝つた、勝つた」と新聞に出ているものとはほとんど同じ。若槻が一番気掛かりな石油について質しても、戦略物資を担当する企画院総裁の答えが、「日本国民に愛国心のある以上、必ず出来る」。量的な見通しを聞いているのに、忠義な国民さえいれば何でも出来ると、精神力で答えてくるのですから話になりません。重臣たちのお知恵拝借どころか、情報は全く与えずに「黙つてついてこい」といった、お座成りの重臣会議でした。十九年七月にサイパン島が陥落して東条内閣が倒れ、代わつて首相になった小磯国昭は、戦争の状態が余りにもひどいのでびっくりしたと云います。予備役とはいえ陸軍大将、直前まで朝鮮総督をして

いて、この程度の認識です。いかにキチンとした情報が流れず、情報音痴の中で戦争であつたかが分かります。

昭和十八年のことですが、代議士中野正剛は元日付け朝日新聞に有名な「戦時宰相論」を書いて、東条首相を批判しました。中野は日露戦争の時の桂太郎内閣を例に挙げ、人材の登用を訴えたのです。中野に言わせると、桂は寧ろ貫禄のない首相だつた。元老の山県有朋に頭が上がらず、井上馨に叱られ、伊藤博文を奉る。それでいて外務大臣に小村寿太郎、海軍大臣に山本権兵衛など、幾多の人材を活用した。戦時下の宰相は強くなければならないが、個人の強きには限界がある。桂自体は小粒の人でも、心の奥底に誠忠と謹慎、桂に身を慎む気持ちがあつたから、それが「あの大幅で、余すところなき人材の動員になつた」と云うのです。

朝日新聞がこの企画を取り上げたのは、「勝つた、勝つた」の大本営発表に浮かれていた時ではない。戦時体制はいかにあるべきか、国内の政治体制をもう一度検討して見る必要はないか。こういう考えで中野に執筆を依頼すると、中野は「東条に謹慎を求めるんだ」と云つて、四十分で書き上げたのだそうです。言論統制の厳しい時代です。よくも一字一句削らずに、事前検閲を通つたものだと思いますが、どうも検閲当局は、この論文を東条に対する激励だと受け取つたようです。東条と云う人は真面目で、官僚的な事務能力には優れていたようですが、大局を見て一国を引つ張つていく、見識と云う点ではお粗末だつたように思えます。お前は小粒の人間だから、せめて人材を登用しろ。こう云われたと思つたのです。東条自ら情報局を呼び出し、朝日新聞の発売禁止を命じましたが、当時の縮刷版を見ますと、この記事は全部削除されて別の記事で埋めてあります。しかし実際の新聞の方は、もうとつくに配達済みで、発禁処分はほとんど効果がなかつたようです。

中野はふだんから「一切を天皇と祖国に捧げん」と云つていたように、反東条ではあつたが、決して反軍でも反戦でもありませんでした。思想的には革新右翼でしたが、翼賛選挙で推薦を拒否して最高点当選するなど、東条に敵対する姿勢を見せましたから、東条には目障りな存在だつたのでしよう。「中野は常に政府に反対の言論行動をしている。平時ならともかく、戦時においては、こうした言動は利敵罪、敵を利用する罪を構成する」。こんな難癖をつけて、憲兵隊に中野を檢舉させたのですが、いくら何でもこれで起訴するのは無理です。しかし中野は憲兵隊から釈放された夜、日本刀で割腹自殺したのです。憲兵に死を迫られたのか、真相は未だにはつきりしないのですが、東条に対する壮絶な抵抗であつたことだけは確かです。

その頃の東条は、陸軍大臣、参謀総長に軍需大臣、一時は内務大臣まで兼務して、権力を一手に握っていました。つまり情報をトップに集中できる立場にいた

わけですが、情報を重視した形跡は全くといってよいほどありません。具合の悪いマイナス情報は、下が上の顔色を見て上げてきません。都合のいい情報を基に希望的観測だけで戦ったのが、太平洋戦争だったのではないのでしょうか。その点日露戦争の指導者たちは、日本の実力、世界の情勢について、ほぼ共通の認識を持っていました。その認識を基に情報を集め、政略、戦略に起用した人たちが見事に期待に応える。勿論ミス・キャストもあったし、情報ミスもありました。しかしトータルで見れば、日露戦争は情報の勝利だったと思うのです。

日露戦争の情報を支えたのは、何といつても日英同盟です。イギリスの情報力が、どれほど凄かったか。幕末から明治維新にかけて日本で活躍したイギリスの外交官に、アーネスト・サトウという人がいます。サトウは攘夷か開国かで揺れる幕府と薩摩、長州の間を出入りして、維新のリーダーと云われた人たちにはほとんど会っています。西郷隆盛に会って、「革命をやるなら今だ。うっかりすると革命が出来なくなる」。こんな忠告までしているのです。弱冠二十五歳、たった一人の公使館員が、実にたくさん情報を集めているのにびっくりします。イギリスが次々と植民地を広げ、あの大英帝国を築き上げたのも、この情報力にあったんだなど、頷けるような気がします。イギリスの外交官は着任するとすぐ、その国の言葉を徹底してやらされるんだそうです。サトウが日本に来たのは十九歳の時ですが、日本人顔負けの達者な日本語を話し、書道まで習っています。当時の幕府の公式文書は御家流という流儀で書かれていて、これが読めないと分からないことが多いと、先生について習ったんだそうです。サトウは日本の手紙文は、やたらと挨拶の言葉を入れればいいので、簡単に書けるようになったと云っています。

余談ですが、いま桜の名所になっている千鳥が淵の桜は、後に駐日公使になったサトウが尽力して植えたものなんだそうです。昭和の初め、日本の英字新聞がこのことを紹介したところ、もうとつくと死んでいると思っただけでしょう。故サトウと「故」をつけてしまったのです。サトウは昭和四年、八十六歳まで長生きしますが、わざわざその新聞記事を取り寄せて日記に貼りつけ、その脇に「not yet まだだぞ」と書いてあったそうです。それはともかくとして、こんな外交官を揃えているのですから、イギリスは情報の量と質の高さで群を抜いています。日本は日英同盟を結んだことよって、そのイギリスから国際情勢の動きを刻々と教えてもらおう立場になり、明治日本の一番の弱点、情報という目と耳の部分も補ってもらったのです。

もう一つイギリスの強みは、ロンドン・タイムズ、ロイターと云った世界を代表する新聞、通信社、つまりマスコミという情報伝達手段、口の部分も持っていたことです。タイムズもロイターも大英帝国と共に発展し、取材網を広げてきました。ロイターは明治四年には早くも横浜、長崎に支局を開設していますし、福

沢論吉の作った新聞、時事新報が明治の知識人に人気があったのも、二十六年にロイターと独占契約を結び、海外ニュースを掲載したからなのです。タイムズ、ロイターの強さは自他共に認めるところですから、「タイムズ、ロイターが知ることは、世界中が知ることだ」とも云われました。ですから、そのタイムズ、ロイターがこの日露戦争をどう判定し、どう報道するかは重大な意味を持っていたのです。

日露開戦は、三十七年二月四日の御前会議で決まり、十日に宣戦布告となったのですが、実際の戦争はその二日前、八日の海軍の戦いで始まっています。日本の駆逐艦隊が旅順口を夜襲して、ロシアの戦艦など三隻を大破させ、朝鮮の仁川でも巡洋艦など二隻を沈めたのです。国民は緒戦の海軍勝利に大喜びしましたが、外国は「問題は陸軍の戦いだ」と見ていました。世界一の陸軍大国であるロシアとどう戦うか、日本にはとても勝ち目がないと思っていたのです。ですから五月一日、黒木為楨大將率いる第一軍が鴨緑江を渡り、対岸に陣地を築いていたロシア軍を破つて九連城を占領した時は、世界中がびっくりしました。この日本陸軍第一戦の勝利を、世界に速報したのもタイムズでした。タイムズはこう書いたのです。「日本軍がロシアの敵になり得るかどうかは、世界中の軍人が持っていた疑問だが、今やその疑問はなくなった。日本軍の士気と勇氣と組織力。鴨緑江の戦いは称賛すべき戦いだった」。この最大級の賛辞は、日本陸軍に自信を与えただけではなく、外債、つまり外国で日本の公債を発行してお金を集めるのに大きな威力を発揮することになったのです。

実は財政、お金の問題こそが、戦争に当たつての日本の一番の悩みでした。戦争には武器、弾薬が要りますし、食糧も要ります。そして何よりも、それに先立つお金が要ります。ところが、そのかんじんのお金が日本にはなかったのです。ロシアなどの三国干渉で旅順を清国に返して以来、日本は「臥薪嘗胆」を合い言葉に、海軍は戦艦六隻、一等巡洋艦六隻のいわゆる「六六艦隊」を造り、陸軍は七つだった師団を十三に増やしました。これを賄つたのは、日清戦争の賠償金のほかは全て増税ですから、国民の税金負担は限界を超えていました。イギリスやアメリカで外債を募集し、それで戦費を調達する以外には、戦えなかつた戦争なのです。

外務大臣の小村寿太郎が日英同盟で重視したのも、この同盟によって日本の対外的な信用を高め、外債を集めやすくすることでした。元老の伊藤博文や井上馨がロシアとの協調路線を探り、何とかして戦争を避けたいと思つたのも、「金がなくて戦争が出来るか」ということだったのです。伊藤「戦争をしろ」と云つて連日のように押し掛けてくる論客を相手に、「わしは諸君の名論卓説より、大砲の数に相談しているのだ」と云っています。つまり大砲を揃える、その弾丸を揃えるのに、お金が必要なんだと云っているのです。事実、日露戦争が始まった時、

日銀が持つていた金貨はわずか一億一千七百万円しかありませんでした。しかも輸入品の決済に当てる分などを差し引くと、正味使えるのはたったの五千二百万円です。このことは元老や政府首脳はもとより、陸海軍の首脳部もよく知っていました。国中が戦争一色に染まっていく中で、首脳部の頭からいつも離れなかつたのが、戦費をどうするか、お金の問題だったのです。

政府は万一戦争になった時、これにかかる費用を四億五千万円と見ました。日清戦争が二億二千万円かかったから、戦争期間を一年として、その二倍見ておけばよからうと思つたのです。結果的に戦争が一年半かかったにしても、この見通しは大甘でした。臨時軍事費として特別会計で処理された日露戦争の戦費は、陸軍が十二億二千万円、海軍が二億四千万円、各省庁の關係費用を入れると実に十九億五千万円と、予測の四倍以上もかかったのです。武器の進歩で近代戦になつたこともありませんが、戦争はやはり金食い虫でした。

二月四日の御前会議では、元老の伊藤や井上から「戦争が長引いても続けるだけの経済力が日本にあるのか」。こんな深刻な質問が、半ば詰問に近い形で大蔵大臣の曾禰荒助に集中しました。正直に答えれば、とても長期戦に耐える力はありません。曾禰が何度か立往生すると、財政通の元老松方正義が助け船を出し、やつと「開戦やむなし」の結論になつたと云います。曾禰はこの後「到底自分の任ではない」と辞表を出しましたが、いくら何でも大蔵大臣が開戦と同時に辞めてしまつたのでは、聞こえも悪いし、財政上の不信を招きます。明治天皇の「助けてやれ」のお声がかかりで、井上や松方が全面的にバックアップすることで辞表を撤回させましたが、事実、元老たちは素早く行動を起こしたのです。ここが希望的観測だけに任せて、突つ走ってしまった太平洋戦争とは違ふところです。

戦争が始まつて間もない二月二十四日、横浜から二人の要人がアメリカに向けて船出しました。一人は日銀副総裁の高橋是清であり、もう一人は貴族院議員の金子堅太郎です。高橋の渡米は、表向きは欧米の市場調査でしたが、もちろん戦費調達の外債募集が目的でした。壮行会で挨拶に立った井上馨は、「もし外債募集がうまくゆかず、戦費が整わなかつたらどうなるか。高橋がそれをやってくれなければ、日本は潰れる」。後は込み上げてくる涙で、言葉にならなかつたそうです。高橋が政府から命じられた外債額は一億円でしたが、ニューヨークへ行つてみると、アメリカ自体が産業振興の真つ只中です。外資導入に懸命になっている時で、とても日本の外債どころの話ではありません。

高橋は日英同盟にすぎる思いで、ロンドンに渡りましたが、ここでも日本びいきの気分と、お金の世界は別でした。「日本が負ける」という声が圧倒的で、四%、五%の利息を付けた戦前の日本公債は、暴落に暴落を重ねていました。ロシアには担保になる土地も鉱山もあるが、日本にはない。日本に金を貸すのは、投資ではなくて投機だと云うのです。それでも高橋は粘り強く交渉し、四月半ば過

ぎには何とか五百万ポンド、日本円にして五千万円の発行をイギリスの銀行に引き受けてもらいました。年六%という高い利息をつけ、償還期限も七年の短期間です。抵当には関税収入を当てることにしましたが、日本の財政が貧弱なことはイギリスの銀行家も知っています。「日本に人をやって関税を管理させよう」。こんな声まで出ましたが、「ワーシップ、軍艦がある」の一声で収まったのだそうです。万一関税が取れなければ、日本海軍の六六艦隊を押さえればいい、と云うのですが、日本の対外信用はそれほど心細いものでした。

残り五千万円をどうするか。高橋が頭を痛めているところへ、ユダヤという思いもかけない人種問題が、高橋を助けることになったのです。高橋がイギリスの友人に招待され、パーティーに出席した時です。たまたま高橋の隣に座ったのがヤコブ・シフという、ニューヨークの有力なユダヤ系金融機関「クーン・レープ商会」の会長でした。この前日米交渉の話をお聞きになった方は、このクーン・レープ商会が三十六年後に、これまた思いもかけない形で日米交渉の橋渡し役をすることになるのを、思い出されると思います。シフは全米ユダヤ人協会の会長をしており、ヨーロッパ旅行の帰りにロンドンに立ち寄ったのですが、高橋は聞かれるままに、戦争が始まってからの日本の様子、外債のことを話しました。すると驚いたことに、翌日シフの使者が高橋を訪ねてきて、残り五千万円をニューヨークで発行することを条件に、全額引き受けるといいます。

シフが高橋に協力を申し出たのは、ロシアに五百万人もいるユダヤ人を助けたかったからでした。帝政ロシアの歴史は、ユダヤ人虐殺と迫害の歴史でもありました。ロシア正教への改宗を迫って、言うことを聞かないと殺してしまう。ことに明治十四年、アレクサンドル二世の暗殺にユダヤ人が関わっていたことから、迫害はひどくなりました。シフは迫害を止めることを条件に、何度かロシア政府に金を貸しましたが、おとなしくしているのは借りた当座だけ。一年も経たないうちに、また始まります。絶望したシフは、この戦争に日本が勝てば、ロシアに革命が起こって帝政ロシアが倒れるに違いない。そう思って、高橋に全面協力を申し出たのです。最初一億円の予定だった外債は、戦費が膨れ上がって次々と発行することになりましたが、シフはその都度、必ず半額ずつ引き受けてくれたのです。日本にとつてはまさに命の恩人でしたが、ある意味では日露戦争は、ユダヤ資本と帝政ロシアとの戦いでもあったのです。

五月に入って第一回公債一億円を売りに出すと、ロンドンでもニューヨークでも買い注文が殺到し、行列が出来るほどの人気でした。帰国したシフが、アメリカの新聞に連日のように日本公債のことを書かせたところへ、鴨緑江を渡った日本軍の勝利をタイムズが速報し、あつという間に人気が上がったのです。この後日露両軍は、八月末に遼陽で正面衝突しました。死傷者の数だけみれば、日本が二万三千、ロシア一万八千と、日本軍の方が五千人も多いのです。しかもロシア

は、最初から日本軍を満州の奥深く引きずり込んで、補給路の延び切ったところを叩く作戦でしたから、遼陽を占領したといっても、一体どっちが勝ったのか、勝敗の判定は微妙なところでした。ところがタイムズもロイターも、とにかく土地を奪って前進したということで、「日本が勝って、ロシアが負けた」と報道したのです。これが大きかったのです。

日本勝利の報道で日本公債は人気を呼び、合計四回にわたって八億二千万円を集めることが出来ました。条件も利息四・五％、償還期限二十年と、最初よりはぐんと有利になりました。こうして高橋一人で集めた金は、日露戦争の戦費の四二％にもなるのですから、まさに殊勲甲の働きと云っていいでしょう。そして、このお金なしには、戦争は一年どころか半年も続けられなかったのです。とにかく大砲の弾丸がなかったのです。戦争が始まって四か月も経たないうちに、前線からは「砲弾送れ」の悲鳴のような催促です。陸軍省の返事は「偏に節約を乞う」。送りたくても砲弾がないのです。遼陽の戦いにしても、退却するロシア軍に決定的な打撃を与えられなかったのは、大砲の砲弾がなくて追撃出来なかったからでした。

何でこんなことになったのか。日本陸軍は開戦に当たり、大砲一門に必要な砲弾の量を一月五十発と予測しました。これも日清戦争の経験から弾きだした数字ですが、経験だけに頼ることがいかに危険なことか。ロシアの近代陸軍と戦うのですから、激戦になれば一日で使ってしまう量です。海原治さんという軍事評論家があります。後藤田正晴さんと同期の旧内務官僚で、戦後防衛庁の官房長、国防会議の事務局長をされた方ですが、戦争中の陸軍主計将校の体験を基に「戦史に学ぶ」という本を書いています。それによると太平洋戦争の時、日本陸軍が大きな戦闘に用意した弾丸、これを一会戦分と云いますが、軽機関銃だと八千発、重機関銃で二万三千発なんだそうです。一分間で五百発発射しますから、軽機関銃は十六分間撃ち続けるとなくなってしまう。重機関銃だって、四十六分の射撃で全弾終了です。何日戦うかわからないのに、たった十六分です。ところがそれさえなくて、大体半分の量しか用意出来なかったと云いますから、物量で押してくるアメリカとは勝負にならなかったわけです。

どうも物量音痴の日本陸軍の体質は、日露戦争から太平洋戦争にそのまま引き継がれてしまった感じがしますが、それでも日露戦争のときはまだ良かったのです。外国に頼むことが出来ましたから。日本陸軍は遼陽の戦いが終わった三十七年九月中旬、クルップやアームストロングなど、世界中の兵器会社に砲弾四十五万発を注文したのです。支払いは当然金貨ですから、高橋の集めたお金がなければ砲弾の注文も出来なかったわけです。

このところよく「平成の高橋是清出でよ」といった声を聞きます。それは高橋が日銀総裁から大蔵大臣を六回も務め、昭和初期の金融恐慌を国債の大量発行で乗

り切り、「高橋財政」として名を成した人だからです。それに、こんなに国民に人気があった政治家も、そうはいなかったのではないのでしょうか。大衆は、ダルマさんのような真ん丸い顔を見ただけで、安心したのです。そして軍部全盛の時代であっても、サーベルをがちゃつかせて脅してくる軍人に対し、少しも臆せずにはつきり物を云う。こうした高橋に国民は拍手を送ったのです。しかしこの人ほど転職を繰り返し、いろんな職業を経験した人も珍しいかも知れません。総理大臣から役人や学校の先生もやりましたし、芸者さんの三味線をついで歩く箱屋から、アメリカでは奴隷まで経験しています。最後は大蔵大臣在任中の昭和十一年、二・二六事件で暗殺されるのですから、まさに波瀾万丈の生涯でした。

高橋は幕府御用絵師の裕福な家に生まれましたが、お母さんが女中さんだったため生後三日目には里子に出されました。仙台藩の江戸留守居役が年若いやがて高橋という、その家の養子になります。仙台藩の江戸留守居役が年若いやが、先に見える人でした。福沢諭吉とも親交があり、これからは英語の時代だと云うのです。高橋は小さい時から利発だったようです。藩から十歳の高橋ら二人が選ばれ、横浜で英語を習ったのですが、教えたのがヘボン式ローマ字で有名な宣教師のヘボンと奥さんです。このとき養子先の祖母喜代子が、「こんな物騒な時代に、子供一人を横浜に出すのは忍びない」。こう云って藩にかけあい、急掬えの家を建ててもらって、自分も一緒に住んで炊事から身の回りの世話をしたと云のですが、なかなかしつかりした女性だったようです。高橋はやがて、シャンドというイギリスの銀行支配人の家にボーイとして住み込みますが、悪戯ざかりの年頃です。仲間と酒を飲むのは、博打を打つはで、酒の肴にネズミを捕まえ、シヤンドの肉焼き器で焼いたというのですから、ひどいものです。シャンドに「それだけはしないで下さい」と穏やかに注意され、高橋も自伝に「あの時だけは恥じ入った」と書いています。実はこの時シャンドと知り合ったことが、外債募集で高橋を成功に導く原動力になったのです。

慶応三年、十三歳の高橋は仙台藩の留学生としてカリフォルニアに渡ります。子供のくせにフロックコートを着て、靴は子供の足に合うものがないので、婦人用の絹のシユスで作ったもの。まあチンドン屋みたいな滑稽な身なりですが、祖母喜代子は短刀を一振り渡して、「これは祖母の心からの餞別ですが、決して人を害ねるためのものではありません。男は名を惜しむことが第一です。義のためや恥をかいたら、死なねばならぬことがあるかも知れない。その万一のために授けるのです」。こう云って、切腹の作法まで教えたそうです。高橋は天性の楽道家でしたが、公の生活では常に私を捨て、国のことを考えて行動しました。これもこの祖母喜代子の、暖かい思いやり中にも凜とした姿勢、これが高橋の人間形成に大きく影響したように思います。

アメリカでの高橋は、さんざんな目にあいます。世話をしたアメリカ人の武器

商人がひどい男で、留学費をポケットに入れただけではなく、高橋を奴隷として売り飛ばしてしまつたのです。高橋は幕府が倒れたと聞いて、やつとの思いで日本に帰つてきますが、出来たばかりの大学南校、今の東大の前身である大学南校に入学します。ところがこの辺が維新の頃の面白いところで、英語が出来るというので、三日後には教官手伝い。生徒が教える側の先生になつてしまい、金の入つた高橋は、十五歳だというのに芸者遊びの毎日です。芸者を連れて芝居見物に行き、酒を飲んでるところを外人教師に見つかつて首になりました。芸者屋に居候して箱屋をするうち、さすがの高橋もこたえたのでしよう。「男一匹、こんなことではいけない」と無頼の生活を断ち切る決心をし、友人の世話で九州唐津の英語学校教師になり、さらに文部省、農商務省と役人生活が始まります。

実は俳句の正岡子規や、やがて連合艦隊参謀として日本海海戦で活躍する秋山眞之は、この高橋から英語を習つてゐるのです。子規はベースボールに野球という素敵な日本語を見つけてゐるのに、英語は苦手だつたようです。東京帝国大学の予科に当たる大学予備門受験のため、四国の松山から出てくると、親友の眞之と一緒に神田の共立学校に入りました。現在の開成高校で、大学予備門の合格率高いので、その頃から人気があつたそうです。高橋はこの共立学校創設に一役買つていたので、役人しながら夜は英語の教師をしていました。「三井の大御所」と云われた池田成彬も、米沢から出てきて高橋に英語を習つた一人ですが、こんなことを書いています。高橋は余り下調べをしないので、時々訳を間違えます。生徒が得意になつて指摘すると、高橋は慌てず騒がず「君たち、そんな細かいことにこだわつてゐると、大人物にはなれないぞ」とすましていたそうです。とにかくコセコセせず、大らかな人でした。このまん丸い、愛敬のある顔の英語教師に、子規のつけた「ダルマさん」の愛称が、高橋の終生のあだ名になりました。

高橋が初代特許局長になつた時です。築地に煉瓦建てのハイカラな庁舎を建てることになり、鹿鳴館を作つたイギリスの建築家コンドルに設計させると、予算より四万円も多い十二万円もかかります。さつそく農商務大臣の井上馨に呼び付けられ、「こんな大きな物を造つてどうするんだ」と叱られました。高橋はこう答えたと言ふのです。「二十年経つて、これでは狭いと云うようにならねば、日本発明界の進歩は覚束ないと思います。東京見物に来た者が、浅草の観音さまの次は特許局を見に行こう、というくらいにしたいと思ひます」。これには井上も大笑いしてOKを出してくれましたが、事実関東大震災で焼失するまで東京の観光名所になりました。そしてこれが、高橋が井上に認められるキツカケだったので。

高橋が三十五歳の時、南米ペルーから銀山開発の話が持ち込まれ、日本最初の合弁事業だということで、高橋は役人をやめて日本代表として参加しました。「日

本に乏しいものは資本で、余りあるのは労力だ。この余力を用いて外国の財源を開き、海外に発展する道を開きたい」。これが高橋の決意でしたが、現地へ行ってみると全くのインチキ話。完全に掘り尽くして廃坑になっている代物で、高橋は大塚・窪町の敷地千五百坪、洋館建ての家を処分して会社を整理したのです。同じ町内の貧乏長屋に引越したため、家族が恥ずかしがっても、高橋は「悪いことをしたわけではない」と平然としていたそうです。友人たちが心配して、県知事など役人の口を持ってきますが、高橋は「これまで私が役人をやったのは、衣食のためではない。いつでも役人を辞めても、差し支えないだけの用意があったからだ。だから上司が間違っていたら、敢然これと議論して憚るところがなかった。ところが今は衣食のために苦勞せねばならぬ身になっている。食うに困って役人になったのでは、上司が間違っているも従わなければならぬことがあるかも知れぬ。こうした境遇で役人になるのはよくない」。こう云って断りました。

日銀総裁から山陽鉄道社長の椅子を世話された時です。現在の山陽本線で、當時は三井が経営していましたが、高橋は「私は鉄道には何の知識も経験もありません。従って社長として、過ちなくやっていく信念がありません。万一その職を辱めるようなことがあつては、推薦者のあなたに迷惑をかけるし、私自身信念がないのに、その地位に座ることは良心が許しません」。こう断つた上で、「役人をやめて実業界に転ずる以上、丁稚小僧から叩き上げる積もりでいます。世話をして頂けるなら、下働きからやらせて下さい」と、新築中だった日銀本店の建築所に事務主任として雇って貰ったのです。技術部監督として設計をしたのが、明治建築学会の第一人者辰野金吾博士です。フランス文学者辰野隆のお父さんで、高橋が唐津の英語学校で教師をした時の教え子でした。その下で働くわけですから、日銀総裁は「それでもいいのか」と念を押しましたが、高橋は「喜んで働きます」と一向こだわりません。これが高橋の日銀入りのキツカケでしたが、高橋を知る人は「高橋の生涯には、この筋金が一本通っていた」と云っています。この筋金こそ、高橋の転職人生と祖母喜代子の教えが築いたものでしょう。そして銀行業務を体で覚えたことが、高橋を実務に通じた経済人として大きく育てることになったのです。

高橋は横浜正金銀行に出向、三菱と合併する前の東京銀行の前身ですが、副頭取になった明治三十一年、欧米に出張しました。この時三十年ぶりかで、さんざん迷惑をかけたシャンドと再会したのですが、大勢の有力財界人を紹介して貰ったことが、高橋の大きな財産になります。そして外債募集に再びイギリスへ行つた時、パース銀行のロンドン支店長になつていたシャンドは、高橋の相談役として、それこそ親身になつて面倒を見てくれたのです。実はヤコブ・シフの使者として、外債引き受けの話を持ってきたのはシャンドなのです。あるいはシフと高橋を結びつけた陰には、このシャンドがいたのかも知れません。

自伝というものは大抵が自慢話でつまらないのですが、高橋の自伝は事実関係がしつかり書いてあるので、面白いだけでなく資料としても一級品です。高橋はその自伝の中で、「人間の運命の不思議さ」について書いています。高橋が里子に出されていた二歳の時、三田の大きなお菓子屋さんから養子の口がかかりました。祖母の喜代子は「二年も育てた可愛い子を、侍ならともかく、町人のところへやるのは可哀相だ。自分の所は身分は足軽だが、まだ自分の家に貰った方がよい」。こう云って高橋の実家とに掛け合い、高橋は仙台藩の足軽の養子になったのです。もし高橋がお菓子屋さんになっていたら、その後の高橋はなかったし、もし高橋がシャンドのボーイをしなかったら、もしヤコブ・シフがパーティーで高橋の隣に座らなかつたら、ちよつとしたことで日本の運命も大きく変わっていたかも知れないのです。

×

×

高橋是清の布石が外債の金集めなら、金子堅太郎の布石はアメリカの世論工作でした。御前会議で日露開戦が決まった二月四日の夜、金子は靈南坂の伊藤博文の官舎に呼び出されました。伊藤は意気消沈していたそうです。だいぶ時間が経ってから、おもむろに口にしたことは、アメリカへ行つてほしいということでした。「世界の列強を見るに、日本の同盟国はイギリスだけだ。フランスはロシアと同盟しており、ドイツも中立とはいえロシア寄りだ。ただ一つ頼むのはアメリカだ。アメリカの世論が日本に同情するよう、有利に導いてほしい」と云うのです。金子は明治四年、福岡藩の留学生として岩倉使節団と一緒に渡米し、そのまゝ八年間もアメリカに残つて、ハーバード大学を卒業したアメリカ通です。伊藤を助けて明治憲法起草の仕事に携わり、農商務大臣などを務めました。伊藤が頼りにしたのは、金子が時のアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトとハーバード同窓だったことです。

元老たちは、戦うにしても短期決戦。潮時を見てさつさと講和に持ち込まないと、国力の弱い日本が負けることをよく知っていました。問題は、どの国に講和を斡旋してもらうかです。それはアメリカを措いて外になく、アメリカ世論を味方に付けてルーズベルトに動いて貰おうという狙いだったのです。金子は「とても自信がない」と断りました。アメリカは国民感情からして、ロシア寄りの国だと云うのです。南北戦争の時イギリスが南軍についたのに、ロシアは今の政府の北軍を助けた。そのことを今でも恩義に感じているし、それにアメリカの大金持ちは大半がロシアの貴族と親戚関係になつている。ロシアの軍需品はみんなアメリカから買っているし、貿易上でもロシアはアメリカの上得意だと云うのです。「とても無理だ」と断りましたが、伊藤は聞きません。「もしロシア軍が九州に上陸してきたら、自分は一兵卒として銃を執つて戦う積もりだ。君も最初から成功しようと思うのでなく、国家のために身を投げ出す積もりで、やれるだけやっ

みてくれ」。最後は伊藤の熱意に動かされる形で、金子はアメリカ行きを承諾したのです。

金子はその足で参謀本部次長の児玉源太郎中将を訪ね、陸軍の見込みを尋ねました。ところが児玉はいきなり、「実を云うと、勝つ見込みは立たんのだ」と冷や水をかぶせるようなことを云います。「この三十日間、わしはこの部屋に泊まり込み、夜は軍服のまま赤ゲツトをかぶつて寝ているが、どうやったら勝負を五分五分まで持つていけるかどうかだ。だが五分五分では勝負はつかん。せめて六分四分にしよう」と、いま苦心しているところだ」。そして「最初の戦いは、北朝鮮のロシア軍を鴨緑江以北に駆逐することだ。とにかくロシア軍の三倍の兵力をぶつけて、絶対に勝つ積もりだ。これが成功すれば、勢いに乗つてあるいは六分四分までいけるかも知れん」。児玉は「だから五度は勝つても、五度は負けたの電報を受け取る積もりでいてほしい。とにかく緒戦に全力を挙げる」と云つたそうです。日露戦争で日本陸軍の全作戦を担当した児玉のこの言葉に、強がりも思い上がりもなく、実情を冷静に判断して、作戦を練つていた姿がにじみ出ています。「戦えば必ず勝つ」と豪語し、ろくに武器弾薬も与えずに「必勝の信念」のみを要求した昭和の陸軍とは大違いです。

実は児玉は、開戦四か月前に参謀次長になつたばかりだったので。山梨県出身で、「今信玄」と云われた田村怡与蔵参謀次長が肺炎で急死し、陸軍は色を失いました。田村がロシア戦の作戦計画、戦争指導の中心だつたからです。後任となると、衆目の一致するところ児玉しかいませんが、児玉はすでに陸軍大臣を務め現在は内務大臣兼台湾総督。それが参謀次長になるのは、二階級も落ちるようなものでしたが、児玉は国家の大事に敢然として引き受けたのです。当時参謀本部総務部長だつた井口省吾少将は、日記に「天のいまだわが帝国を棄てざるを知る。なんらの喜悦、なんらの快事ぞ。陸軍中、少将の中に求めて、適任この人の右に出づる人あらじ」と書いています。そして児玉は金子に約束した通り、鴨緑江の第一戦でロシア軍二万に対して、日本は四万二千五百人の兵力をぶつけたのです。黒木大将の第一軍が九連城を占領したと報告を受けて、児玉は男泣きに泣いたと云います。

海軍大臣の山本権兵衛は、金子に「日本の軍艦は半分は沈める覚悟だ。それでも勝利を得るために、何か良い方法をと考えている」と云つたそうです。金子への期待がいかに大きく、しかもその使命が重大だつたかは、翌朝美子皇后、後の昭憲皇太后がわざわざ金子の自宅を訪ね、「よろしく頼みます」と言葉をかかれたことでもわかります。外務大臣の小村寿太郎はハーバード時代、金子と一緒に部屋に下宿して、勉強をした仲でした。その小村が金子に指示したことは、第一に、日本が妥協のためにあらゆる手段を尽くしたことを知ってもらうこと、第二に、ロシアは黄禍論、黄色い禍と書きますが、黄禍論を宣伝するに違いないか

ら、アメリカ国民に正しく理解して貰えということでした。

人種問題には三つあります。ユダヤ人問題、黒人問題、そしてこの黄色人種の問題です。三国干渉で旅順、大連を日本から取り上げた時、ドイツ皇帝ウイヘルム二世は、「黄色人種の進出が白色人種に禍を呼ぶ」として黄禍論を唱えたのです。ヤコブ・シフが外債に協力を申し出た時、一番喜んだのはイギリス政府だったと云います。黄色人種の日本に協力しているのは、イギリスだけでなく、アメリカもしているのだと。それほど黄禍論というのは厄介な問題だったのです。金子がアメリカへ行った時も、アメリカの空気ははるかにロシア寄りでした。ロシア政府はニューヨークの新聞に金を出して、「ロシア優勢」の記事を書かせていましたし、yellow little monkey、「黄色い小さな猿」という言葉を使つて、「この戦争は白色人種に対する挑戦だ」と書いている新聞もありました。金子は新聞に論文を載せたり、アメリカ各地を講演して回つたりして、日本の立場を説明しましたが、アメリカの世論を大きく日本に味方させるとなると、頼みはやはりルーズベルト大統領しかいません。

実は二人はハーバードではすれ違いで、在学中は知らないのです。明治二十二年、金子が伊藤博文の指示で議会制度を調べるために渡米した時、日本美術の愛好家に紹介されて知り合つたのです。ハーバード同窓ということ得意投合し、「デディ」、「ケン」と呼び合う仲になりました。偉くなる前に知り合つたので、かえつて遠慮のない友達同士になつたといひます。

三月の末、金子がホワイトハウスを訪ねると、数十人の面会者が待つていと云うのに、ルーズベルトはわざわざ出てきて、金子の肩を抱くようにして部屋に招き入れました。そして「自分は政治家として、ロシアの皇帝による専制政治を好ましく思つていない。アメリカ政府の上層部も、一様に日本に好意を持つていることを知つておいてほしい」と云うのです。金子は前途にパツと光明を見る思ひでした。早速「極秘情報」として、小村に会見の詳細を報告しましたが、五月の末ルーズベルトはこう切り出したのです。「ロシアも戦争の終結を考えなければならぬ時がくると思う。その時は自分が講和の斡旋に尽力したいと考えている」。ルーズベルトは初めて、仲介役の意志があることを口にしたのです。金子が渡米してから三か月後のことでした。そのルーズベルトの提唱でポーツマス講和会議が開かれ、国力の限界に近付いていた日本が、とにかく勝利をもぎとることが出来たのですから、金子のアメリカ工作もまた殊勲甲だったと云えるでしょう。それにしても、開戦と同時に戦争終結への布石を打つ。伊藤や小村の周到さに、明治の政治家は偉かつたなと、改めて感心致します。

実は日本はもう一つ、ロシアを国内から揺さぶる布石も打つていたのです。その頃のロシアは、皇帝独裁に対する不満から、暴動、暗殺など革命の火種があちこちにくすぶつていました。フィンランド、ポーランドのようにロシアに侵略さ

れた国でも、過激派の独立運動など、まさに暴発寸前でした。こうした帝政ロシアをの不安定な情勢に注目したのが、ロシア公使館付武官をしていた明石元二郎陸軍大佐です。ロシアをちよつと突つつけば、国内から崩壊するに違いない。そう思った明石は、開戦と同時にスウェーデンのストックホルムを本拠に、ロンドンからパリ、ベルリンと、ヨーロッパを所狭しと駆け回る活動を始めたのです。

明石には児玉参謀次長から、「ロシア国内に諜報網を作れ」という極秘命令がきていました。「児玉がさすがだな」と思うのは、その指示が実に的確、周到なことです。児玉は、ペテルブルク、モスクワ、オデッサの主要都市に、情報提供者を二人ずつ配置せよ、と命じていました。理由は、二つの情報を比較することによつて、より客観的に事実を見極めることが出来ると云うのです。適任者を雇う場合、お互いに相手が誰かわからないようにしろ、とも指示していました。互いに知っているのと、二つの情報がある間にか一つのものになってしまう恐れがあるからです。明石は東ヨーロッパ系のスパイ七人を、ロシア国内に潜入させましたが、昭和の日本陸軍に一番欠けていたのは、この情報を総合的に比較検討して判断する姿勢だったと思うのです。第二次世界大戦が始まって、ヨーロッパ駐在の陸軍武官からは、いろいろな報告がきていました。ドイツ軍のイギリス本土上陸作戦は難しくなっていること、イギリス空軍の方がドイツ空軍より優勢なことなど。ところが参謀本部は、こうした情報を握り潰してしまいました。ドイツ電撃作戦の華々しさに目を奪われ、ドイツ必勝を信じ込んでしまったのです。

明石はスウェーデン陸軍にも情報網を張りました。フィンランドを奪ったロシアは、隣のスウェーデンにとっては侵略国であり、仮想敵国でしたから、観戦武官としてロシア軍に従軍する参謀将校が、情報提供を約束してくれたのです。明石にとって大きかったのは、フィンランド革命党の党首シリヤクスを同志にしたことです。この人は、ヨーロッパの革命運動家に大変顔の広い人でした。日本の軍人である明石は、表だって行動出来ません。その明石に代わって謀略工作の表の顔となり、明石の手足となって動いてくれたのがシリヤクスだったのです。

こうして三十七年十月、パリで帝政ロシア打倒の合同会議を開かれました。この会議をきっかけにポーランドで始まったゼネ・ストはロシア本国にも広がっていきましました。翌年の三十八年一月二十二日には、首都ペテルブルクで有名な「血の日曜日事件」が起こったのです。「生活苦から救え、憲法を作れ、戦争を止めろ」という請願デモが十万人に膨れ上がり、賛美歌を歌いながら王宮に向かって行進を始めました。止めようとしたコサック騎兵が、サーベルを抜いて襲いかかり、無抵抗のデモ隊に一斉射撃をしたので、広場を血で真っ赤に染める大惨事になったのです。ロシア政府発表は死者百人でしたが、ロイターは死者二千人、負傷者五千人と伝えています。作家のゴーリキーは、「ロシアにはもう皇帝はいない。自由の戦いを始める時がきた」と演説したそうです。六月には、黒海に面し

たオデッサで映画で有名な「戦艦ポチョムキン」の反乱事件」が起きました。明石が陰で糸を引いていたという説もあります。反乱水兵のリーダーに、四万円の運動資金を渡していたと云うのですが、いま一つはつきりしないようです。

日露講和条約の調印は三十八年九月五日ですが、翌日の六日夜、フィンランド沖で一隻の貨物船が座礁しました。船底から多数の小銃と弾丸が見つかり、ヨーロッパの新聞は「怪船、怪しげな船現わる」と騒ぎましたが、実はこれも明石工作の一環でした。明石はスイスで小銃二万五千丁、弾丸四百万発を買い入れ、フィンランドやコーカサスの革命派に渡そうとしていたのです。

兎玉の後に参謀次長になった長岡外史少将は、「明石には百万円送金した」と云っています。カレーライス一杯七銭の頃の百万円です。今の金だと八十億円の大金だと云われますが、これだけの莫大な資金をふんだんに使って、東に西にヨーロッパを駆け巡った明石は、多くの「明石神話」を生み、司馬遼太郎さんの「坂の上の雲」など小説にも取り上げられました。しかしロシア国内の攪乱に直接どれだけの効果があったかとなると、正直いって分からない部分が多いようです。ただ明石にはぴったりロシアの密偵がついており、その行動にロシアはピリピリ神経を尖らせていました。そして現実には各地で暴動が起これば、満州へ派遣を予定していた精鋭部隊も、暴動鎮圧のため動かせません。ロシア政府にとつては、戦争よりも国内の秩序崩壊が問題になってきたのです。ロシアが日本よりもはるかに力を残しながら講和に踏み切ったのも、段々と忍び寄ってくる革命の影に怯えたからなのです。そう考えれば、ロシアの怯えを煽っただけでも、明石工作の効果は大きかったと云えるのかも知れません。

ヨーロッパを股にかけて、こんなスケールの大きな謀略活動をするには、明石は打ってつけの人だったようです。創造力豊かで、物事を組み立てる構想力に優れている。熱中すると、他のことが目に入らなくなる。これは明石の士官学校同期生が書いているのですが、元老の山県有朋を訪ねた時の話です。説明に夢中になって、ついにはトイレに起つのも忘れて、小便を垂らしながら延々と話し続けたと云うのです。謹厳で鳴るさすがの山県が、明石の迫力に押されてしまつて、自分の足元が濡れてきても黙って聞き入るよりなかつたと云います。

福岡藩の千二百石取りの家に生まれた明石は、幼い時に父親を亡くし、学費のかからない陸軍幼年学校に入つて、陸軍将校の道を選びました。子供の時のあだ名が「鼻っ垂れ」。大人になつても余り変わらなかつたとみえて、フランスの公使館付武官になつた時、「近ごろわしも齒を磨くようになった。昔に比べると随分文明紳士になつた」と手紙に書いているくらいです。士官学校の成績で抜群だったのが、語学、数学、漢学。悪かつたのが図学で、絵はうまいのですが、手垢と鼻汁で画用紙が汚れてしまいます。しかも、本人が熱中すればするほど紙が真っ黒になり、図学はいつも最低の成績でした。服装も全く無頓着。ポケットには穴

が開いているし、ボタンも千切れている。よくぞ士官学校に入れたものだと思いますが、草創期の明治は何となく全てが大雑把で、何か一つ見所があればといった気分だったようです。規律とか秩序とかが喧しくなってくるのは、日露戦争に勝って、日本の官僚体制が確立してからののです。

このちよつと変わった軍人のことを、陸軍もよく承知していたとみえて、明石の軍人の経歴がそれを物語っています。とても指揮官には向かないと思つたのでしよう。陸軍大学を卒業して二十五年間、部隊勤務はたった一年半です。後は全部外国にいるか、参謀勤務です。陸軍中尉でドイツに留学すればドイツ語に熟し、フランスやロシアに行けばフランス語、ロシア語に没頭する。陸軍は語学の才能があつて、熱中癖のあるこの男を買っていたようです。革命派の武器援助に明石が四十五万円を要請してきた時、外務省から反対が出ました。背後に日本がいることが分かつた時、内政干渉と非難されるのを恐れたのです。参謀総長の山県有朋が反対を押し切つて承認したのは、日本の戦力が尽きかけ、一刻も早く講和に持つていきたい時、明石の工作に大きな期待をかけたからでしょう。そして何よりも、明石の資質を買っていたからこそ、四十五万円の大金をたつた一人の明石に任せただと思ひます。

このところ外務省が機密費問題で大揺れしましたが、その点明石はびっくりするほど几帳面でした。明石一人の裁量で何に使うか、その権限は参謀本部から与えられていましたし、それこそ機密費ということにすれば、何に使つてもわかりはしないのです。ところが明石は、列車のトイレの中で腹巻ごと数百ルーブルを落としてしまい、この領収書がなかつたくらいで、後は使い道をしっかり金銭出納帳に書き残しています。そして使わなかつた二十七万円は、帰国すると全額陸軍省に返却しているのですから、実に立派なものです。

日露戦争当時の日本は、情報の収集にも大変熱心な国でした。ロシアがだんだん日本の脅威になつてきた時、日本陸軍最大の関心は、明治二十四年から建設が始まつたシベリア鉄道です。万一戦争になったら、ロシアはヨーロッパからどれだけ兵力を送り込めるのか。それはシベリア鉄道と、その支線である東清鉄道の輸送力にかかつていたからです。明治二十五年にドイツ駐在武官の福島安正中佐が馬でたつた一人、氷点下四十度のシベリアを横断して帰つてきた有名な話も、このシベリア鉄道を探るためでした。私たちが子供の頃は、山中峯太郎の「敵中横断三百里」に夢中になつたものですが、明治、大正の子供を熱狂させたのが、この福島中佐のシベリア単騎横断です。一年四か月かけて一万四千キロ走破したと云うのですから、まさに世界のトップニュースでした。朝日新聞は西村天囚という名記者をウラジオまで派遣して、「単騎横断録」を百二十回にわたつて連載しましたが、一言付け加えますと、習志野の歴史の会で会長をお願いしている福島さんは、この福島中佐のお孫さんです。(福島尚郎さんは平成十六年没)

参謀本部もロシアとの戦争に備えて、シベリアに次々と手を打ちました。まず三十年四月、西本願寺の布教僧に化けた花田仲之助大尉をウラジオに潜入させると、三十二年には石光真清大尉がシベリアに入り、ハルビンで菊地正三の変名で写真館を開きました。この石光を助けたのが、「シベリアからゆきさん」と呼ばれた日本人娼婦だったのです。シベリア鉄道建設には大勢の日本人労務者が行っていましたから、だまされて売られていった女性もシベリア各地にいました。石光の書いた手記「曠野の花」を読みますと、彼女たちは悲しい境遇にもめげず、実に見事な大和撫子なのです。満州を荒らし回る馬賊の頭目のお妾さんになった女性も多く、その馬賊がまた信義に厚い男たちでした。彼らは官憲に捕まっても一切口を割らずに、まるで西瓜を割るみたいに、スパスパ頭を切り落とししていく処刑にも、平然と首を切られていったそうです。石光がハルビンで写真館を開くことが出来たのも、また満州各地を旅行してシベリア鉄道、東清鉄道の情報を集めることが出来たのも、このからゆきさんと馬賊の協力があつたからなのです。

石光はスパイの商売に写真館を選びました。ドイツから最高の写真器材を入れて、ハルビンの信用を集める。写真器材は全てウラジオ経由で東京から取り寄せましたから、このルートを使って情報を東京の参謀本部に送つても、怪しまれないと思つたのです。これだけの技術を持った写真屋は、そうはいません。ロシア軍は鉄道の建設状況や鉄橋など、写真を撮つてほしいと頼んできたのです。もちろんロシア軍の警戒も厳重です。現像には必ずロシア兵が立ち合い、焼き付け後は原板をその場で回収しました。そこで石光は、特殊な加工液でわざとボケた写真を作り、帰つてからその失敗写真を復元して、参謀本部に送つたのだそうです。疑われないように、記念写真のようなものまで必ず失敗写真を作り、ロシア軍の目をごまかしたと云います。停車場から機関庫まで詳細に記入した東清鉄道の予定路線図も手に入り、日本の参謀本部は開戦直前には、シベリア鉄道や東清鉄道の全貌をほぼ正確に掴むことが出来たのです。

こうした工作は満州各地で活発に行なわれました。「満州義軍」と称する馬賊を指揮して、ロシア軍の後方攪乱に当たつたのは花田仲之助です。軍事探偵・横川省三、沖禎介のように、鉄橋爆破ためチチハルに潜入してロシア軍に捕まり、銃殺刑になつた悲劇もありました。情報の失敗も幾つかありました。要塞旅順の正体が掴めないまま、無謀な正面攻撃を繰り返し、大きな犠牲を出したのはその最たるものでしょう。もう一つ大きな失敗が暗号です。日本の外交暗号がロシア側に筒抜けになつていたのでした。

栗野慎一郎ロシア公使は国交断絶の通告前夜、皇帝ニコライ二世の招待で帝室劇場の観劇会に何食わぬ顔で出席しました。皇帝の謁見はいつもなら二、三分で終わるのに、この夜はいつになく丁寧で、まるで永い別れを惜しむかのようでした。ロシアの閣僚も何となく落ち着かない態度だし、フランス公使も「いよいよ

お仕舞ですな」と声をかけてきます。粟野は直観的に暗号が盗まれ、翌日の六日に通告する予定の国交断絶通告文を、ロシアは知っているのではないか。そう思つて外務省に問い合せましたが、返事は「絶対大丈夫」。一方、明石元二郎大佐もおかしなことに気付いていました。明石は「あばずれ」をもじつた「アバズレス」の変名でヨーロッパ各地を回っていました。ロシアの女スパイが「アバズレス」を指名して接触を求めてきたのです。「アバズレス」が明石だと知つてゐることは、暗号が盗まれていることになりません。

それがはつきりしたのは、戦争も終わりがけた頃でした。ロシアのスパイが金ほしさに、盗んだ暗号表をフランスの日本公使館に売り込みにきて分かつたのです。ロシアはオランダの日本公使が単身赴任なのに目をつけ、女スパイを女中として住み込ませ、彼女は公使の机の合鍵を作つて暗号表を写真撮影してゐたのです。何ともお粗末な話で、日本の手の内をすつかり知られた状態で、戦争か和平かのギリギリの外交交渉をしてゐたことになりました。

国交断絶したら、有利な態勢で先制攻撃をかける。これが日本の作戦でした。ところが暗号を盗んでいたロシアは、そんなことは百も承知で、ニコライ二世は「日本から先に手を出させろ」と、極東総督に命令しています。そして八日夜、日本の駆逐艦隊が旅順口を夜襲すると、ロシア側は「宣戦布告しないで攻撃してきた」と日本の「騙し討ち」を強調したのです。それにしても日露戦争と太平洋戦争は、全く同じパターンを繰り返しています。太平洋戦争の時も、開戦一年以上も前、昭和十五年九月には日本の外交暗号はアメリカに盗まれていたのです。ロシアもアメリカも、武力に自信を持つ国は、まず相手に一発撃たせようとしてゐます。そして先制攻撃をした日本が、非難されたのも同じでした。

ところで戦争中の情報には、当然のことながらどう規制するか、報道管制が伴います。政府は日露開戦の直前、外交や軍事の機密事項について、新聞・雑誌掲載禁止の措置を取りました。二月六日付、つまり日本が国交断絶した日の読売新聞の社説は、タイトルが「秘密又秘密」。政府の報道管制で、何でも秘密、秘密でさっぱり分からないと批判していますが、その社説自体、検閲にひつかかつて伏せ字だらけでした。戦争報道にはどの新聞社も力を入れ、各社四十人くらいの戦時特派員を戦地に送り、月二十回は戦時号外を発行しています。新聞記者の地位も低い頃でしたから、戦地では厄介者扱い。待遇も悪いし、取材には相当苦勞したようです。特派員連名で「冷遇すること奴隷の如く」と待遇改善要求の決議をしているくらいでした。ただ太平洋戦争の時のように、「勝つた、勝つた」で都合のいいニュースだけを、軍艦マーチで流すわけにはいかなかったのです。と云いますのは、二十世紀最初の戦争だと云うので、至る所に外国特派員の目が光つてゐます。どんどん外国の新聞に載つてしましますから、政府が隠しておきたいニュースも隠しておけなかつたのです。

三十七年五月十五日、初瀬、八島の二隻の戦艦がロシアの機雷に触れて沈没した時です。「六六艦隊」の一角が崩れ、一夜にして虎の子の戦艦の三分の一を失ったのですから、日本海軍のショックは大きく、極秘扱いにしました。しかしここでも、タイムズの目はごまかせませんでした。取材体制が凄いです。タイムズの特派員は汽船をチャーターして無線機を積み込み、イギリスの租借地・威海衛の無線中継局経由で、船の上から直接ロンドンに記事を送ったのです。日本海軍は日英同盟の誼みで、タイムズにだけ海戦現場の自由航行を認めていましたが、「日本海軍危うし」の報道が世界に流れました。これが第一回外債の募集前だったら、金集めは大変なことになっていたでしょう。

この初瀬、八島の沈没も、情報の失敗だったと云えるかも知れません。実は一か月ほど前の四月十三日、旅順艦隊の旗艦ペトロパウロスクが日本の機雷で沈められ、名將と云われたマカロフ提督が戦死していました。いつも同じコースを通って艦隊行動しているのに目をつけ、そこに機雷を敷設して置いたのですが、因果はめぐる。日本艦隊も同じことをやって、敵討ちされたのです。艦長の中からも危険を指摘する声が出て、五月十五日限りでコースを変更することが決まりましたが、その最終日にやられたわけです。情報をすぐ教訓に生かさなかつた。一か月近くも空費したことが命取りになりました。

しかしこのピンチを救ってくれたのも、日英同盟によるイギリスからの情報だったのです。日露戦争の直前、南米のチリとアルゼンチンの間が一触即発の状態になり、両国は一生懸命イギリスとイタリアで軍艦を造っていました。ところが話し合いがついて戦争の危機が遠退き、要らなくなった軍艦を売りに出すと云う情報が、イギリスから入ってきたのです。日本はイタリアで建造していたアルゼンチンの巡洋艦二隻を百五十三万ポンド、日本円にして千五百万円で、ロシアとタッチの差で買うことに成功しました。まさに明治三十六年も暮れようとする十二月三十日のことで、日進、春日と命名されました。

戦争に間に合うように、この二隻を一刻も早く日本に持つてこなければなりません。この時春日の輸送責任者を務めたのが、ドイツ駐在武官をしていた鈴木貫太郎海軍中佐です。侍従長の時二・二六事件で重傷を負って奇跡的に助かり、戦時内閣最後の総理大臣として戦争を終わらせた人です。この頃はロシアも新鋭の軍艦を極東にどんどん回している最中でした。わが乗組員といえば、イギリス人もいれば、イタリア人、ギリシャ人もいるといった、お互い言葉も通じない多国籍部隊です。途中で戦争になつてロシアの軍艦とぶつかれば、砲弾も積んでいませんから一たまりもありません。鈴木中佐はいざとなつたら、火薬庫に火をつけて自沈するしかない、覚悟を決めていたそうです。ところがイギリス海軍はイギリス人乗組員保護の名目で、最新鋭巡洋艦を日進、春日の護衛につけてくれたのです。そしてロシアがチリの戦艦を買おうとすると、それより高い値段を付

けて、横取りしてしまったのもイギリスでした。日英同盟万万歳と云つていいでしょう。日進、春日は、日本海海戦では戦艦戦隊に入つて立派に代役を果たしましたが、この二隻がなければ日本海海戦のパーフェクトゲームも、あるいは違った結果になつていたかも知れないのです。

きょうは情報を軸にして、日露戦争とそこに活躍した人たちを見てきました。だがここには、当時政界でも役人や軍人の世界でも主流であつた、薩摩、長州の出身者は一人もいません。高橋是清は仙台藩、金子堅太郎と明石元二郎は福岡藩ですし、石光真清が肥後熊本藩、小村寿太郎は宮崎県の飫肥藩というちっぽけな藩の出身です。いずれも薩長主流の藩閥政治の外にいた人たちです。小村なんかはハーバードを出ても、薩長出身の同期生からはるかに遅れをとり、翻訳局長でくすぶつているところを外務大臣の陸奥宗光に認められ、初めて道が開けたと云います。中野正剛ではありませんが、まさに余すところなき人材の登用であり、活用でありました。薩長中心の首脳部が藩閥にとらわれず、広く人材に目をつけたのも大きかつたし、目に留まるだけの土台もありました。高橋と金子が藩の留学生、小村は文部省の留学生、明石や石光が軍の留学生といつたように、彼らはみんな若くして外国に行つています。外国の新知識を身につけて、表舞台へ出ていつたのです。

幕末から明治にかけての日本は、文明とか機械技術、産業の面では遅れていても、文化の面ではかなりの水準を誇つていい国だつたように思います。そしてその土台は藩校、藩の学校という極めて個性的な、特色のある士族の教育制度が築いたのではないのでしょうか。ちっちゃな藩でも、蘭学に力を入れた藩は多かつたし、高橋是清の仙台藩のように早くから英語教育に取り組んだ藩もあります。幼くして父親を亡くした明石は、母親から漢学を学んだと云います。実に多様で豊かで、そして活気に満ちたこの明治の人材は、地方、地方で違う、質の高い文化から生まれたように思います。

日露戦争の頃の日本は、情報に敏感な日本でした。超大国ロシアの脅威に直面して、情報の収集、その分析と評価に心血を注ぎました。ただ福島中佐の単騎シベリア横断にしろ、明石や石光の諜報工作の成功にしろ、それは組織的というよりは属人的、こうした人たちの資質と努力に負うところが大きかつたのです。日本とイギリスとの違いは、こうした情報収集を組織的に育てるかどうかの違いにあつたように思います。ですから「明石神話」は、いつの間にか謀略工作が海外武官の仕事だと錯覚させてしまったのです。陸軍も謀略工作のため、莫大な機密費を作りました。六年ほど前でしたか、国会図書館から今村均陸軍大将の生前の証言テープが公開されました。今村は太平洋戦争開戦の時、ジャワ派遣軍司令官をした大変立派な軍人ですが、昭和十一年に関東軍の参謀副長をしています。今村の証言によると、関東軍の機密費は五、六百万円もあつたと云います。今の金

だと百億円くらいでしょう。しかも陸軍省の機密費も預かっている、その利子は自由に使っていることになっていたので、今村は「関東軍の参謀は宴会ばかりしていて、これが参謀、ひいては陸軍の墮落を招いた」と証言しています。

地道な情報収集よりも、謀略工作に血道をあげる。そして日露戦争に勝って、一等国になった慢心が情報に鈍感で、情報を見下し、軽視する日本を作ったように思います。